

え ぼ し 烏 帽 子 遺 跡

調査の経過 烏帽子遺跡は東海市の高横須賀町に所在し、名古屋南部の臨海工業地帯から天白川を隔てた知多半島の西岸北部に位置する。地形的には、知多丘陵西側の沖積低地にあり、海岸線と並行する3条の砂堆列のうちの最も海岸線沿いの砂堆上に立地し、現地表面の標高は3m前後である。また、本遺跡の周辺には、同砂堆上に、弥生時代の遺跡と製塩遺跡が散在している。

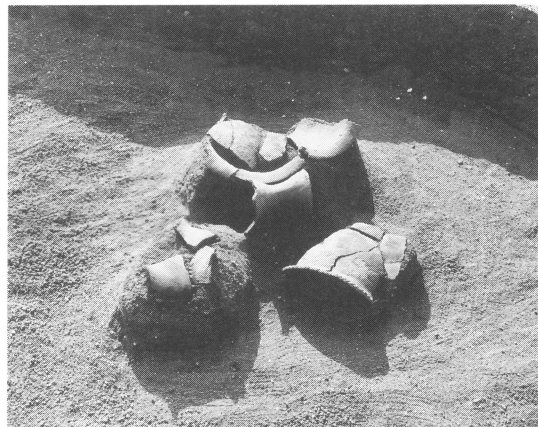
今回の調査は、国道155号線の建設に伴う事前調査として実施した。期間は、平成5年の11月から平成6年の2月までで、総面積2,040㎡である。

調査の概要 調査区は、国道155号線の建設予定地内を横断する通学路・生活道路の関係から、A・B・Cの三区を設定し、A区を調査した後、B・C両区を同時に調査した。

A区では、現地表面下に濃茶褐色砂層・黒褐色砂層の遺物包含層の堆積が認められた。これらの層から、弥生時代から平安時代までの遺物が混在して出土したが、層位的に明瞭に分層することはできなかった。遺構としては、近世及び弥生時代から古代にかけての溝・土坑・ピットなどがある。近世の遺構については、調査区の南西角で東西方向の溝1条とピット群が検出された。調査以前に、尾張藩の第二代藩主徳川光友が造営した横須賀御殿の一角がA区の西部にかかる可能性が指摘されていたが、出土遺物が乏しいため、検出された遺構との関係は確認することができなかった。弥生時代から古代の遺構については、土坑多数と溝2条が検出された。土坑の中には住居跡と思われる遺構もあるが、炉・カマドなどは検出されていない。遺物には、弥生土器・石器・須恵器・土師器・製塩土器・近世陶磁器などがある。特に、弥生土器は遺構内より中期の良好な一括資料をえることができた。須恵器・製塩土器も相当量出土しており、本センターが昭和63年度に調査した松崎遺跡にちかい内容を示している。

B区では、西半部に近世の盛土と思われるオリーブ色粘質土ブロック層が現地表面下にみられる。この盛土は、先に述べた横須賀御殿と関係するとも考えられる。中央部では、御庭焼の製品や窯道具がコンテナ20箱程度出土した。窯体遺構は検出されなかったが焼土・灰が確認でき、御庭焼の窯跡であるならば、生産が行われていたことになり、注目に値する。下層にはA区でみられた黒褐色砂層の遺物包含層が堆積する。

C区は、大幅な攪乱を受けており包含層の残存状況は悪い。(秋田幸純)



A区 SK200弥生土器出土状態



93A区 下面全景